贋作幽霊園遊会

tontokaimo39

贋作幽霊園遊会

「園遊会って、一度喬一がガードマン頼まれたことあったわね」
「俺はそれよりラーメン屋を思い出すぜ」
「ラーメン屋？」
「ほら俺はフロックコート、夕子は宴会用のドレスでラーメン屋だ、あの時のお客みな驚いてたぜ」
「ああ、あれね、喬一頭をポカンとやられたっけ」
「おい、変なこと思い出すなよ」
「フフフ、あの事件ね、赤毛連盟よ」

私は夕子と歩いていた、
直子の父親から食事に招
待されたのだ。
「私、園遊会といいまし

た？ごめんなさい、そんな大げさなものではないのです、私の家、よく庭で食事をするのです、私が小さい時、お母様に『お庭で夕ご飯食べること何て言うの』と尋ねたのです、『そうね、園遊会かしら』と教えてもらいました、それから、庭での食事は園遊会ということになったのです、私の家だけで通用する言葉です、父が『気楽に来ていただきなさい』って」

と、言う訳で、今日はフロックコートとドレスではない、二人ともいたってカジュアルな服装だ、招待時刻は五時、まだ四時前だが、直子の家の近くの博物館で少し変わった展示会が開催されている、それをゆっくりと観賞してというのが今日の予定だった。

「おいおかしいと思わないか？」

「喬一も気づいたの、変よね」
先ほどから、子どもが後を付けて来るのだ、隠れて付けて来るわけではない、二人の歩調に合わせようとして、せっせと追いかけて来る、のんびりと歩いているからいいようなものの、普通の大人の歩調なら苦労するだろう、小さな女の子、ランドセルを背負っているから下校途中のようだ。
二人が足を止めると、さっと駆け寄って来た。
「ねえ、私たちに何かご用？」
「おばさん、お母さんのところまだ？」
「えっ？何のこと？」
「お母さんのとこ、連れてってくれるんでしょ」
「あら、どうして？」
「だって、おばさんたちがお母さんとこ連れてってくれるといったもん」

「誰が？知ってる人？」
「うん」
「どこで？」
「学校の門のとこ」
「困ったわね、私たち人違いよ」
ちょうどその時だった
「純子ちゃんでしょう、純子ちゃんよね」
と声がかかった、三十代と思われる女性と同年代らしい男性の二人連れだ。
「おばちゃんたちと違うの？男の人と女の人の二人が来るから、その人がお母さんのとこへ連れてってくれるって」
「よかった、純子ちゃん探してたのよ」
といったのは声をかけてきた女性だ、なるほどむこうも男

女の二人連れ、そして俺たちも、そこで人違いをしたわけか。

「よかったね純子ちゃん、じゃあよろしく」

というわけで私たちはまた歩き出した。

「一年生だろうな、下校時刻にしては少し遅過ぎないか？」

「このごろ鍵っ子教室なんてのがあるのよ、家に帰っても一人ぼっちの子のために、本当の授業の後でボランティアなどが面倒をみるの」

「ふうん、そうか」

「喬一の隠し子が追いかけて来たのかと思った、『待って！愛しのお父さん！』なんて」

「バカ言え、『お母さん』と言ったじゃないか、てっきり夕子のことかと思ったぜ」

「それこそバカよ、私の子だったら、そうね、中学生のころに生まれたことになるじゃない」
「ハハハ、しかし、おばさんと言われたぜ」
「現代の教育、間違ってるのね、しっかりと言葉を教えないから」

＊＊＊

直子の家に着いた、大会社の重役の邸宅と聞いていたにしては小さい、これ見よがしの大げさなところがなくて好ましい構えだ。
「いらっしゃいませ宇野さん、夕子先輩」
直子が迎えてくれる。
「ハハハ、直子が園遊会と言ったそうですね、お恥ずかしい、そんなものではないのです、どうぞご遠慮なく」

直子の父上も出てくる、初対面ではないのだが言葉を交わすのは初めてだ。

直子のおっしゃる園遊会が始まった、それほど広い庭ではないが、あちこちに花が植えられている、その庭の芝生の上に机と椅子が持ち出してあるのだ。

「このお父さんね、本当にバカなんだから、変なことに凝って、お二人にはご迷惑おかけてしまいました」

というのは直子の母上、二人ともざっくばらん、となると直子のあの丁寧な言葉使いは一体…

「私と母でつくりました、お口に合いますかどうか心配なのですが、どうぞお召し上がってくださいませ」

そら出てきた、と、お召し上がる、旨い！

「すごくおいしいわ、直子料理上手なのね」

「夕子先輩は、おこげをつくるのがお上手とうかがってい

ますが、本当ですか？」
おいおい、しかしそれは本当だ。
「これ直子、失礼なこと言うんじゃないの、この子少し変な言葉を使うでしょう、祖母の影響なの、直子が中学のころ亡くなりましたけど」
そうか、で今は親子三人水入らずの団欒、園遊会を楽しんでいるのだな、夕子の両親が健在なら今頃夕子も同じように…と思うと夕子が愛おしくなる、ただし、夕子がそれを気にしているようすはまったくない、今度は父上との会話を楽しんでいる。
「ホームズお読みになってるんですね」
「若いころだったけど、夢中になったこともありますよ、ハハハ、アイリーンには驚きました」

五人の会話は弾み、楽しい園遊会だった、ところが一時間は過ぎたろうか、父親の携帯が鳴った

「ちょっと失礼」

穏やかだった彼の顔が、突然真剣なものに変わった

「純子が！行方不明…」

私は夕子と顔を見合わせた、純子！先ほど聞いたばかりの名前ではないか、もちろん図書館の淳子であるはずがない。

「私の妹の子どもです、まだ学校から帰らないそうだ」

「ピンクのランドセルで一年生ぐらいのお子さんじゃないですか」

「ああ、一年生です、どうしてそれを？」

夕子が先の出来事を説明する。

「男女の二人連れですか…ともかく妹の家に行ってみます、宇野さん、夕子さんご一緒していただけますか」

「もちろんです」
「私も行くわ」
「いや直子はお母さんと片付けをしなさい、二人の男女がからんでるんだ、単なる迷子ではないだろう、大勢でばたばたしない方がいい、宇野さん、夕子さん、せっかくおいで願ったのに…」

「妹は涼子といいます、一年前夫に先立たれてしまいましてね、純子は彼女の一人娘です、うちの直子はもう大学生ですから、仕事が忙しいのならうちで預かってもいいぞと言ってるのですが…」
「何のお仕事ですの？」
「出版社です、何と言うのだったかな、山崎なんとか言う作家の担当になったと張り切っています」

「キャリアウーマンですね」
「まあ仕事の方は恵まれていましてね、ただそれだけに純子の方が…」
純子の家に向かうタクシーの中だった。

「普通なら四時過ぎには帰っているはずなのです、私が帰るのは六時、ただ今日はちょっとした会合があるので少し遅くなると言っておいたのですが、『うん、いいよ』と言ってたものですから…おやつは多めに用意しておきました、学校から帰ったようすはありませんし、おやつも食べていません…」
時計を見ると、もう七時をまわっている、
「実は、私たち純子ちゃんに会ってるのです」
と夕子が二人連れのことを話している間に、私は携帯で

原田を呼び出す。

「いや、誘拐と決まったわけではないんだ、ただそのつもりで」

やがて宅配便のトラックが到着する、荷物は原田と技師と電話の録音装置、宅配便が来るにはおかしな時刻だが、まあこれは仕方がない。

「お話の二人、まったく心当たりがありません…」

と、話していたその時ベルがなった。

「奥さん、落ち着いて、私と同時に受話器を上げてください」

と技師が指示する

「はい、浅田です」

「あのう、純子ちゃんのお母さんですか？」

「あ、はい、あの、純子は無事なのですか？」

「さっきまで寝てたのですが、お腹がすいたと言っていますよ、早く迎えに来てください」
「えっ、あっはい、あのどこでしょ？」
「〇〇町の青山台マンションです」
「青山台、あ、じゃあ２０３号室？」
「ええそうです、あれ？どうして知ってるのですか？でも純子ちゃんのこと、びっくりしましたよ」
「あ、はい、すぐ参ります」
誘拐犯とのやり取りにしては妙な会話だ
「青山台マンションの２０３号室は、仕事の都合で少しの間使っていたところなのです、そうか、純子は私がそこに居ると思って…すぐ行ってみます」
「男の声でしたね、念のため同行しましょう」
と私

純子は無事帰った

「すぐそこのコンビニへと思って、鍵をかけないで出たんです、そこで友達に出会って話し込んでしまって、帰ってみると驚きました、知らない女の子が寝てるんですから、ランドセルの中に連絡帳があったので、それを見て電話したのです」

と、言うことだったのだ。

「純子、お母さんがあそこにいると思ったのね？」

「うん」

「純子ちゃん、私を覚えてる？あの時の二人どうしたの？」

と、夕子

「うん、あのおじさんとおばさん、自動販売機のジュースがうまく出ないってガチャガチャやってた、私、あそこ

ならよく知ってるから、二人はほっておいてマンションへ入ったの、でも眠くなって」

「とんだお騒がせをして…」

と直子の父親

「いやいや、無事でよかったですよ、」

「ほんと、それに純子ちゃんって可愛いですね」

と言いながらも夕子は何かを考え込んでいる。

翌日の夕方、私は夕子と馴染みの喫茶店で待ち合わせた

「夕子の意見通り、家の中をくまなく確かめたそうだ、異状は何も無し、盗まれたものも無いそうだ、あの二人組み、結局誘拐に失敗したと言うことだろうな」

「私は誘拐じゃないと思うわ、誘拐だと人目につかない

うちにさっさと車に乗せればいいわけでしょう、それを徒歩で連れまわってるのよ、あれでは目撃者様どうぞごらんくださいじゃないの、それに私たちに顔を見られても、二人とも平気だったじゃない」

「じゃあ何だ？」

「ねえ、純子ちゃんのお母さんの携帯、番号聞いてるのでしょう、二つのこと聞いてみて、会合と言ってたでしょう、何の会合か、それから一度家に帰らなかったかって」

私は涼子を呼び出す、すぐに応答があった。

「会合はちょっとした職場の慰安会だったそうだ、いつもの仕事用バッグは邪魔なので一度家に立ち寄り、代わりのハンドバックを持って出たという、三時過ぎのころだそうだ」

「やはりね」

「うん？どう言うことだ？」

「また赤毛連盟よ、純子ちゃんが帰るのは四時、お母さんは六時、この間の二時間程度、純子ちゃんちは無人であって欲しかった」

「家が無人？午前中ならいいじゃないか、純子は学校、母親は職場だ」

「だから、お母さんが置いてったバッグよ、午前中ならまだ無いでしょう」

「しかし無くなったものは何もないってことだぜ」

「そこが問題ね、無くなってないように見えていて、持出されたもの」

「うん？何かのデータか？」

「そう、純子ちゃんに帰られては都合がわるかった、二人組って言ってるけど本当は三人、ほら純子ちゃん言って

たじゃない、学校でおじさんとおばさんに付いて行けと言われたって」

「なるほど、二人は純子を連れまわって帰さない役、その間に残る一人が純子の家へか」

「そうよ、でも三人がかりで何のためかしら…」

＊＊＊

それから約一月、何もなかった、いや一課の仕事がなかったわけではもちろん無い、あの、直子の叔母のことだ、ところが一月の後、夕子は直子からまた助けを求められたと言う。

「夕子先輩、涼子叔母さん困っていらっしゃ、あいや、困ってるんです」

「ああ、純子ちゃんのお母さんね、どうしたの？」
「これなんです」
「あらこれ、河波出版の『推理世界』じゃない、ふうん『新人賞決定、青い空洞、鈴木健二』か」
「そう、それなんです、その『青い空洞』鈴木健二の作品じゃありません、叔母さんが担当していた山崎雄一の作品なのです」
「山崎雄一、あ、そう言えば直子のお父さんが山崎なんとかといってた、そうか…、叔母さんは白馬社だったわね」
「そうなんです、で叔母さん、もう作品を読んでる編集長から『これはどう言うことだ』と叱られているのです。」
「そうか、そう言うことだったの…ね直子、部室へ行ってみましょ」
「えっ、部室ってどこですか」

「決まってるじゃないの、ミス研よ、貴方も私も部員じゃないの」

「あ、そうでした、それで夕子先輩とお近づきになれたのでした、わあ先輩が行くと、みんな大喜びですよ、先輩最近はずっとお顔をお出しではないのですから、みんな、けむたい先輩がいなくなっていいな、なんて言っていますし」

「それってどう言う…まあいいわ、で直子、山崎雄一って知ってるでしょ」

「はい、叔母が担当しているミステリー作家です」

「そうじゃないの、山崎雄一ってね、私たちの大先輩なのよ、彼はT大でミス研出身なの」

「えっ、そうなんですか、今度叔母に教えておきます、T大のミス研は変な人が多いから気を付けなさいって」

＊＊＊

場所はあるホテルの小宴会室、ならんでいるのは直子の父親、私こと宇野喬一、夕子、直子、そして直子の叔母涼子とその上司、さらに中堅の人気ミステリー作家だという山崎雄一、手配したのは直子の父だが、裏の指図はどうやら夕子らしい。

「今しばらくお待ちくださいませ、もうお一方お見えになられるのです」

と口を開いたのは夕子、おいおい、直子の真似をしなくてもいいじゃないか。

涼子と同じ年代と思われる女性が現れた、座っていた男女三人が同時に口を開く

「山下さん！」

と言ったのは涼子

「山下君！」
は、涼子の上司白馬社の編集長
「鈴木さん！」
は、山崎雄一だ。
「ご無沙汰しています、山下京子、旧姓鈴木です」
その女性はすぐ腰を下ろして夕子に顔を向ける、気づいた
夕子が
「この方、涼子さんと同じ白馬社にいらした方です」
と、直子の父親と私に向かって紹介する
「こちら直子の父上、あ、涼子さんのお兄様、それからこ
ちらは宇野喬一、私の叔父です」
「えっ、夕子先輩！宇野さんって先輩の恋人でしょ！」
「もう、直子！」
座が一瞬和むが、すぐもとの奇妙な雰囲気に戻る、なにし

ろこの会合が何を目的にしたものなのか、誰にもわかっていないのだ、知っているのは夕子だけらしい。

「編集長、それから涼子さん、ご迷惑をおかけして本当に申しわけありません、それだけでなく涼子さんには純子ちゃんのことで大変なご心配をおかけして…」

と、山下と名乗った女性が話し始める

「純子ちゃんを連れまわったのは私の妹夫婦です、妹たちは、純子ちゃんがいなくなって青くなっていました、適当に時間をつぶしてお家までおくる予定だったのです」

「あら、どうして純子ちゃんを…」

と、直子が驚いて声を上げる。

「私は、涼子さんの家に忍び込み、バックにあった原稿の入っているメモリーの中をノートパソコンに写しました、山岸さんの原稿『青の空洞』です、何度もお邪魔している

涼子さんのところですから、忍び込むのは何でもありませんでした、ずっと黙っているつもりだったのですが、こちらの夕子さんに見事見破られてしまいました。」

「純子ちゃん、始めに声をかけられたのは『知ってる人』と言ったのよ、それに涼子さんがバックに原稿のメモリーを入れてる習慣を知ってて、現在の担当やその日の会合の情報が掴める人、となると涼子さんの同僚だった方しかいない…決め手は推理世界の新人賞『青の空洞』作者鈴木健二ですけど」

「それだ、山下君、いったいなぜ？」

と編集長

「はい、これからお話します、河波出版の新人賞募集に『青の空洞』を投稿したのは私です、山岸さん、貴方のデビュー作『赤い咆哮』は、私の兄、鈴木健二の作品でしょう！」

一同に衝撃が広がる、しかし山岸に動揺の様子は無い。

「私の兄は大学卒業と同時に亡くなりました、貴方は今人気作家、それは貴方の実力に違いありません、でも貴方は、交際のあった兄の作品を盗作してデビューされた」

山下京子は一冊のノートを取り出す、かなり古いもののようだ、

「これは最近になって、兄の遺品の中から見つけたものです、この中に書いてあったのは、貴方のデビュー作『赤い咆哮』そのものでした、私はこれを見て、初めて貴方の盗作に気づきました、だから私は、貴方の作品『青の空洞』を兄の名で河波出版に投稿したのです、お互い様ではありませんか！」

あたりの空気は凍てついたようだ、しかし山岸は平然としている。

そのとき夕子が一冊の薄い冊子を取り出した
「山岸さん、これ」
「うん？ああこれ！これをどこで？」
「山岸さん、いや先輩とお呼びしていいでしょうか、私と直子は貴方と同じＴ大の文学部、ミス研なのです」
「ああそれで、しかし懐かしいな、これあのころの同人誌だ…あ、そうか、ある男性の後輩から聞いたことがあるぞ『我がミス研には、今、Ｔ大のマドンナがいるんですよ』と、それが貴女のことだな」
「もう、先輩！」
珍しく夕子が照れている
「夕子先輩は、男性部員の憧れの的です、でも女性部員からはけむたいおばさんと」
「こら直子！」

「ハハハ、夕子君と直子君でしたね、頼もしい後輩がいて心強い」
おいおい、盗作を指摘された緊張の場面だと言うのに一体何だこれは?うん、マドンナで憧れの的、俺はそんな夕子と付き合っているのか、と思うと悪い気はしないが、そうなると俺は、男子学生からは嫉みの的か…
「山岸先輩、貴方からお話してください、私は大体分かっているつもりなの」
「うん、この同人誌からですね、しかしよく…」
「文体ですわ、その同人誌の文と、『青の空洞』『赤い咆哮』の文体や表現の癖を比較しました、私ってこれでも文学部ですわ」
ですわ、だと?夕子が俺にそんな言葉を使ったことが一度でもあったか…

「わかりました、山下さん、いや鈴木さんの方がいいな、『赤い咆哮』は貴女のお兄さんの作品ではありません、間違いなく私の作品です、貴女はそのノートをお兄さんのものと思われたのでしょうが、それは私のノートです、そうだ、最後の方のページを見てください『草原の輝き、花の栄光』なんて書いてあるはず、当時人気だった映画のキャプションですよ、その言葉が気に入りましてね、あちこちに書いたものです、私のイニシャルＹ２も入ってるはず」

「えっ」

山下京子は慌ててノートを確かめる

「あ、確かに…」

「いいんですよ、間違われてもおかしくない、当時私と貴女のお兄さんとは、作品ができるとノートに写し、それを交換して批評し合っていたのです」

「そうなんですか、私なんてことを…」

「もう一つお話しますと、『青の空洞』あれが貴女のお兄さんの作品、だから新人賞は鈴木健二の作品でいいのです、鈴木は私にとってかけがえの無い友人でした、しかしあまりにも早く他界して…一作でもいいから、彼の作品を世に出したかった、その時思い出したのが彼から預かっていたノート、そこに書いてあったのが『青の空洞』です、私は最初鈴木の名前で出すことを、担当の涼子さんに頼むつもりでした、ところが河波の新人賞募集に現れた」

「私、大変なミスをしてしまったのですね…」

「いやちょうどよかったのですよ、白馬の編集長さんの前では言いにくいのですが、実は私は河波新人賞募集の選考委員の一人でもあるのです、『青の空洞』が送られて来た時は驚きましたよ、でもすぐ鈴木の妹、そう貴女のことに

気づいたのです、ただ貴女が白馬にいたことは知りませんでした」

「じゃあそれを新人賞のトップに選んだのは山岸さんの仕業？」

直子の叔母涼子が初めて口を開く

「ええ、私が推薦したのですが、他の委員に異論はありませんでした、あれはいい作品ですから」

「じゃあ河波は、もうその事情を知ってるのか？」

と、編集長

「ええ、編集長や涼子さんに謝らないと、と思いながらどうも言い出しにくくて」

「それで早く発表しましょうと言うのをぐずぐずしていたのですね、あ、それから編集長だけでなく、当然貴方から叱られるだろうと覚悟していたのですが、貴方はずっと

黙っていました、私をかばってくださってるのかと思ってましたのに」

「あ、いや、そ、それもあって…」

と、山岸が口ごもる、

「もう、早くおっしゃってくださってたら…」

「ごめん、君にはどうも…」

「あら、そう言うことだったの」

夕子が、突然口を挿んだ、

「ねえ直子わかったでしょ」

「はいわかりました先輩、純子ちゃん、いいお父さんができますね」

途端に山岸と涼子の顔がそろって赤くなる。

「なるほどそうだったのか、これで一件落着だな、ところで直子、山岸さんという凄い先輩、それに夕子さんという

これまた凄い先輩に恵まれているんだ、おまえも頑張らないと」

「はい、お父様ご心配いただきましてありがとうございます、直子、お二人に笑われないように一生懸命頑張ります」

みんながどっと笑い出す、直子の言葉は、どこまでが自然に口から出たもので、どこからが冗談なのかわからない

「よしこのあたりで乾杯しよう」

直子の父の合図で、すぐに料理が運び込まれる

「今日こそ存分に召し上がってくださいよ、宇野さん、それから夕子さん、もちろんみなさんも」

「おいしいわ、でも直子、この前の直子の料理、本当においしかった、直子の未来の彼氏って幸せね」

「あら先輩、私おこげも好きなのです、ねえ宇野さん、宇野さんもおこげって大好きですよね」

「ああ？う、うん…」
おい、突然私に振って来るな
「だったら宇野さんも幸せになりますよね、宇野さんの近い未来の奥様もおこげつくるのがお上手ですから」
「こら直子！」
睨んだ夕子の顔が少しだけ赤くなったように見えた、いや確かに赤くなった。

おわりに

園遊会というには少々こじつけ、私も赤毛連盟を書きたかったのですが、おかしなものになってしまいました。

次は幽霊記念日、原作は「キャア」という悲鳴とともに女学生の頭に赤い液体、そして人魂が二つ三つ…さて、もどきの方は出るか出ないか…

フロックコートとドレスでラーメン屋へ、これは原作の事件です。

ここに書いた氏名はすべて架空のもの、万一同名の方がいても、何も関係はありません。

奥付

贋作幽霊園遊会

http://p.booklog.jp/book/70468

著者 : tontokaimo39
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/70468

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/70468

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ